声なき声を集め抵抗につなげよう

徳島県 たたかう女子会 川原 まち

閉塞しきった自治体職場

私たちは地方の小さな自治体で働き、組合役員も担っています。

現在、自治体職場では行財政改革で人員削減が進められている上、財政難で「予算を使う前に知恵を使う」が徹底された経費削減が行われ、閉塞感で息もつけない職場になっています。日頃から「議員からの要望を遂行するために管理職から無理難題を押し付けられる」「通常業務でもギリギリの状況なのに、さらに国から別の事業を急に降ろされた」などがあり、その上「仕事ができないなら組合役員を辞めろと言われた」「仕事でわからないことを教えてもらおうとしたら『自分で考えろ』と拒否された」「他の職員に聞こえるくらいの大声で人格否定された」などパワーハラスメントのようなこともあり、上の役職に自分の意見が言えない風潮が作り出されています。

このような厳しい状況の中、組合からは脱退者が出たり、組合運動に関心のない仲間が多くなっています。さらには、組合役員を長年担っている仲間からも「これ以上首長に強く要望したら、報復されるのではないか」と、これまで要求していたことでさえもためらう声が出されています。しかし、一個人が職場で声を上げられない状況であればなおのこと、労働組合でしっかり組合員の意見を拾い、集約して要求しなければ、職場が改善されることはありえません。

女性はさらに押し込められている

未だに男性中心の社会である今日では、女性の社会的地位は地域でも職場でも変わらず低く、女性が意見をすることが煙たがられていたり、そもそも意見することが許されない風潮が大半です。「たたかう女子会」では、

県内各地の女性活動家が集まり、これまでの女性のおかれてきた地域や抵抗の歴史を学び、議論し、各地での女性運動に反映することから女性の地位向上を目指しています。

声なき先に平和なし

以前、組合の青年女性部運動を通じての平和学習の取り組みで、日本が中国で行なった侵略戦争について学ぶ機会がありました。これまでの学校教育では詳しく取り上げられなかった「７３１部隊」の人体実験、「奪い尽くし、殺し尽くし、焼き尽くす」と言われた「三光作戦」など、当時の日本軍による被害の資料館見学、生存者の証言など、知らなかったことを大いに学ぶ機会となりました。訪れた資料館には、人体実験に参加していた教授による「日本の思想にもっとも欠けていたものは、良心に従って立ち上がる抵抗の精神だった」という言葉がありました。それを見て、日頃からおかしいことは「おかしい」と言い続けないと、戦争という有事の際に声をあげることなど絶対にできない。そして日常の組合運動と平和運動は切っても切り離せないのだと改めて気付かされました。

職場から声を上げよう

現在、世界を見るとロシア・ウクライナでの戦争やイスラエル軍によるガザ地区への攻撃により何の罪もない人々、とくに女性や子どもの命が奪われ続けています。そんな中、イスラエルとの軍事面での交流をより進めている日本政府には憤りしかありません。各地での紛争は「外国で起こっている問題」「日本にとって無関係なこと」、と切り離せる問題ではありません。いつのまにか私たちが再び「加害」の立場に立つという歴史を繰り返さないよう、政府の動きをしっかり注視し、日常から反戦平和を訴えていくことが必要です。

そのためにも、職場でなぜ自分の意見が言えなくなっているのかをみんなで考え、声にならない声を拾い、要求にして交渉・実践・周知を通して労働組合の存在感を強化・拡大していくしかないと感じています。この社会をより良いものとしていくために「おかしいことはおかしい」と声をあげ、行動していく必要性は増しています。「平和は職場から」といいます。平和あっての職場・生活ということをいつも心にとどめ「良心に従って立ち上がる抵抗の精神」を忘れることなく、仲間とともに運動を進めていきましょう！　（かわはら　まち）